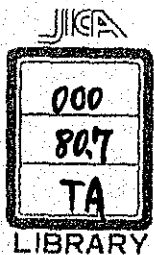


昭和39年度 農業普及集団研修 エヴァリュエーション報告書

昭和39年10月



海外技術協力事業団国内事業部

國際貿易專業團	
銷 '84. 5. 23	C 000
登錄No. 1218	80.7
07280	64A

序

この報告書は農業普及集団研修について開催された、エヴァリユエーション・ミーティングならびに研修員（当時入院中の中華民国・陳氏を除く）より提出されたファイナル・レポートにもとずいて作成したものである。

エヴァリユエーション・ミーティングは下記により実施された。

記

日時：昭和39年11月27日 10:00~12:00

場所：中央研修センター

出席者：研修員10名

国 籍	氏 名
Afghanistan	Ghulam Mustafa
China	Yu-show Chen
"	Pai-show Hwang
Indonesia	Aminullah Hafidz
Iran	Majdedin Hashemi
"	Mahmoud Saffari
Malaysia	Abdul Jabar
"	Soong Wooi Mooi
Thailand	Chalerm Chuntarassot
"	Thavi Masmondana

事業団 研修第一課 岡部職員，村越職員
室課長補佐
中村職員，八島職員

JICA LIBRARY



1056732[9]

(1) 研修の概要：

この研修コースは昭和39年10月12日にはじまつた事業団のオリエンテーションののち、研修先での研修は10月19日から開始され、11月27日に了つた。研修の目的、内容、日程、参加者の名簿は別添のとおりである。当初、コロンボ・プラン地域の諸国を中心として6ヶ国から、11名の参加者が予定されたが、インドネシアの参加者2名のうち1名の来日がなかつたため、結局10名のものが研修に参加した。最も遅れて到着した者でも10月13日には来日したので研修先での研修におくれたものはなかつた。

このコースの特色は比較的短い期間(実質的には6週間に足りない)にそのなかばに近い日数が視察旅行に当てられていたことである。これは「農業普及」という分野の特殊性からくる必然的なアレンジメントであつたと考えられるが、のちに触れるようにきわめて具体的、実際的な問題をもたらしした原因のひとつのようである。

(2) コースの全般的評価：

参加した研修員が提出したエヴァリュエーション・レポート及びエヴァリュエーション・ミーティングでの発言でかなり卒直に披瀝され意見によると今年の農業普及集団コースは全般的にみて成功からはかなり遠い結果に了つたという印象を強くする。以下研修コースそのものと、その他の面とに分けてエヴァリュエーションの結果を要約する。

(3) 研修コース：

表現のし方に若干のニュアンスのちがいはあるが、参加研修員はかなり卒直にコースの内容について失望したと述べている。この点について殆んどどの研修員に共通な不満は次のような諸点にあるようである。

a) 研修先での講義の内容が「限られており、また初歩的であつて」農業

普及の専門の知識や従術が全くといってよいほど得られなかつた。この点に関して多くの参加者は、来日前了解していたところではこんどのコースの研修内容はかなり高度のものであり、従つて各国政府はそれに応じたレベルの高い参加者を送つたのに、実際にコースに参加してみると期待した研修内容との間にかなり大きなギャップがあつたといつてゐる。

- b) 日本の農業普及の現状についての講義はあつたが、今日のような段階に到るまでに直面したと思われるいろいろの困難や問題の紹介及びそれらをどのように克服し、解決したかについての説明をきくことが殆んどできなかつた。
- c) 講師のうちには十分な用意なしに講義をおこなつたと思われるものが少なかつたし、講師の間での Coordination が不十分な印象をうけたとの声が少くなかつた。その結果しばしば統計数字の羅列におわつてその数字が意味するものの説明がなかつたり、また講義の内容にかなりの重複があつた。
- d) 多くの研修員は自国の農業普及の現状とそこにある問題点を提起して日本の専門家とともに討議をおこない、そのうちから解決の方途をみだしたいと希望していたようであるが、その種の討議の機会はほとんどなかつた。
- e) 講師の英語の力の関係で多くの講義は研修管理員（途中で交代したため都合2人）の通訳を通しておこなわれたが、専門の用語あるいは説明についての通訳に手間どり、かなり時間を浪費した。
- f) 農業普及の技術についての実際的な研修は全くうけられなかつた。
- g) 研修の大きな部分を占める視察旅行については、訪問先の関係者が見学のプログラムについて前以つて準備してゐなかつたような印象をうけた。また試験所や研究機関での活動や成果について余り情報が得られなかつた。研修員の多くは、彼らに同行する O T O A や農林省の職員は専

同的な分野についてもつと英語の知識が低しかつたともいっている。

h) 研修に關係して配布される資料については、全員(但し日本語の方が英語よりも解る中国の研修員1名を別にして)が、英文のものでなければ意味がないといっている。

i) 研修の効果が期待したほど挙らなかつたのについて、何人かの参加者は、「おそらく期間が限られていたため」であろうといっているが、研修期間をもつと長くすべきであるとのべたものは1人もなく、コースの計画がもつとよくつくれ、徒らな重複や無駄がなかつたら現在の期間で充分であるといっている。

(4) その他:

a) 現在OTCAから支給されているLiving Allowanceの額が充分でないといっている参加者は例によつて多いが、特に研修旅行中は最少限度の支出をまかなうこともむづかしかつたという声がつよかつた。これに關係して、或る研修員は旅行中のPer Diemが全く支給されなかつたという誤解を抱いているものがあつた。(実際には規定により7日分までのPer Diemは支給されたが、研修旅行の日数が7日を大きく上まわつたため、旅行の方法を経済化するとともにPer Diemは各自の手渡されなかつただけであり、もちろん支払われた。)

b) 旅行中の計画が必ずしもうまくできていないため身体的な過労をもたらしたり、ときには到着後急に宿所が変更になるということがあつた。また、宿泊の条件がわるく、しかも高価であつたという批判がつよかつた。

c) 1, 2の例外を除いて全員が来日前に研修の内容の詳細について参加者に知らせてもらいたかつたと要望している。又、日本での生活条件とくに生活費について事前に情報を得たかつたといっている。又数人の研修員は、日本に到着しなければならぬ日時を知らせてもらいたかつた

と付け随えている。

Evaluation Meetingで明らかになつたが、10名の研修員中研修のプログラムを何らかの形で入手したものは3名であつた。

d) 日本に到着したとき空港での出迎えがなくともまつたとのべているものが約半数あつた。(インドネシアの1人のみ)

e) 研修場所であつた農林省海外研究室への往服は、いたずらに時間と交通費の負担を加えただけで、何故事業団の中央研修センターが利用できなかつたかという声がかかりあつた。

(5) 研修の成果：

以上のような多くの批判はあつたが、多くの参加者はこのコースのため日本に来ることができたことを喜んでおり、又コースに参加したことによつて少くとも日本の農業普及が深い経験をもち、現在機構的、行政的にも技術的にも非常にうまくいつていることを認めたよりである。特に彼等を印象づけた諸点は次のようなものである。

a) 農業普及がそのなかの各分野で専門の指導・普及員をもつまでに発達していること。(参加者の国々の多くでは“Generalist”としての指導・普及員の数さえ絶對的に不足している現状からの意見)

b) 普及員の養成、訓練機関が充分であり、各県のレベルで上記のような専門の指導員まで訓練できること、また普及員の再講習(in-service training)が非常によくおこなわれていること。

c) 試験、研究機関と農業普及の間に緊密な連絡がうちたてられていること。

これらについて、全参加者は異口同音に国情に応じて“Modification”をして適用したいといつている。たゞタイ国の研修員2名はそういう方向への努力はしなければならぬが、実現にはかなりの時間がかかることであると、より實際的な所見をつけ加えている。

しかし、日本において農業普及員と農民との間の好ましい関係、それをうらづける農民側の自覚と進取の気風、さらにそれをうらづける農村をふくめての国民教育の普及といつた重要な問題にふれたものはひとりもなかつた。

(6) 研修員のサジェスチョン

今回のエヴァリユエーションを通じて、もし今後この種のコースが開かれるならという前提で、研修員からはかなり積極的なサビスチオンがあつた。それらのうち多くのものが同意したのは次のようなものである。

a) 今度の参加者のようなレベルのもののためなら、いわゆる“研修コース”ではなくセミナーにしてはどうか？日本よりもかなりおくれた国々の農業普及の発達にとつて役立つのは、各国が現在かゝっているいろいろの困難や問題を出しあつて、豊富な経験をもつ日本を指導者として討議研究することだと考えられるからである。

b) もし、農業普及の知識や技術について“training”をおこなうことを目的としたコースであるなら、むしろ現場の若い要員を招いてもつと実際的な研修をすることがより効果があるのではないか？その場合、研修は東京ではなく、農村地帯でおこなうことは考えられないか？

(7) あとがき：

今回のエヴァリユエーションで特に感じたことは Evaluation Papers を読むと、ほとんど全員が同じことを同じように書いていることである。（なかには文章も用語も全く同じものさえある。）この事実は Evaluation Paper を提出するに先だつて、参加者が予め意見をまとめたことを暗示する。（この点は事実であつたことがあとでわかつた。）このことは少なくとも参加者の多くが Evaluation Paper の提出をある程度真剣に考えたということ、また少なくともそれに記入された見解や意見は参加研修

員の unanimous なそれであることを示唆するが、この2点はエヴァリ
ーション・ミーティングでも証明された。また、研修員はコースその
ものに対しての不満はあつても、OTCAに対してはむしろ協力的であり、
Meeting での発言も卒直ではあるが好意にみちており、建設的な印象を
うけた。

以 上

月日	研修場所	研修内容	ねらみ
10. 19	海外研修室	オリエンテーション	
20	"	日本における農業事情	
21	"	日本の農業指導の歴史および普及事業の歴史	
22	"	普及事業の組織と運営(予算組織の研修)	
23	"	討議	
24	"	試験研究と普及について	
25	"	休日	
26	"	普及指導の内容と方法	
27	"	討議	
28	"	第一次視察オリエンテーション	
29	群馬	県における普及事業の運営, 農家訪問(酪農)	日本の農業事情の代表的な地域を視察しながらその発展を促した要素として, 普及事業の実際を農民組織, 試験研究との関連において見学させる。
30	"	普及所訪問, 構造改善地域訪問	
31	新潟へ移動		
11. 1	新潟(佐渡)	休日	
2	"	県における普及事業の運営, 農家訪問(とくに稲作普及)	
3	"	普及所訪問, 試験場訪問	
4	長野へ移動		
5	長野	果樹地帯と生産出荷組織および普及活動	
6	"	花卉地帯と生産出荷組織および普及活動	
7	帰京	花卉地帯	
8		休日	

月 日	研修場所	研修内容	ね ら い
11. 9	海外研修室	農村青少年組織とその活動	農村青少年の育成状況および農協活動を中心に、近辺の農業資材生産に対する見学
10	"	農村青少年の育成方法	
11	"	第二次視察オリエンテーション	
12	大阪へ移動		
13	大 阪	大阪農林センター訪問, 農機具工場見学	
14	"	そさい園芸地帯の農協組織	
15	京都(観光)	休 日	
16	三重へ移動		
17	三 重	県における普及事業の運営, 農村青少年の育成状況	
18	"	農村青少年との討議	
19	静 岡	かんきつ地帯の生産出荷組織	
20		農業資材生産工場視察	
21	帰 京		
22		休 日	
23	海外研修室	視察結果のまとめ	
24	"	研修成果について討議	
25		レポート作成	
26		"	
27		都内見学(農技研)マイクロス	
28		研修終了式, 送別会	
29		休 日	
30		離日手続き, 駐日公館挨拶	

